

TERRAVIVA



United Nations Conference on Sustainable Development
Conferência das Nações Unidas sobre Desenvolvimento Sustentável

RIO+20 | Rio de Janeiro | June 2012

#3
Friday,
June 22,
2012

The Merry Umbrella Project sends an optimistic message to participants at Rio+20



Busan Balanai/IPS

Rio + 20:

The Rift Between Hope and Power

TERRAVIVA

[日本語訳] Rio+20: 希望と権力の狭間
リオデジャネイロ市街地のデモンストレーションと市民社会活動家のcolourful People's summit が意見交換をおこない、スローガンを訴え、ほぼ全ての物に対し強烈に抗議した。そのころリオセントロ市では、何時間にも渡り政府の退屈な発言が続いた。それはあたかも全く同じゴーストライターによって書かれたものようだった。さえない茶色の三つ揃いのスーツによって新鮮だった空気はうって変わった。おそらく薄灰色の未来がやってくることを説明することを恐れた為だ。Rio+20は、湾岸地域にみられたように、路頭に迷う人々が、協議会による平板な言葉でつくられた議定書によって歴史が変化するかもしれない。しかしながら、それは道の終りではない。そして国連の為でもなく、市民社会のためである。世界的団体の事務局長がその議定書にに対し「臆病である」と述べた。そして、活動家の運動は不完全だったとみなされた。2014年に向けた、持続可能性の進歩の到達地を定義しなければならない。それはリオで締結された「満場一致」のものよりも更に大胆でなければならない。

At the demonstrations in the streets of Rio de Janeiro and the colourful People's Summit, civil society activists brainstormed together, chanted slogans and railed against nearly everything.

Meanwhile, in Riocentro, hours upon hours elapsed in dull deliberations and speeches by government officials that seemed as if they had been penned by

the same ghost writer. Fresh air was exchanged for drab three-piece suits, perhaps explaining the lack of courage to forge a less grey future.

Rio+20 may pass into history as emblematic of the vast gulf between the cries in the streets and the uninspired language of the conference's final outcome document.

But it is not the end of the road, not for

the United Nations or for civil society. The world body's own secretary-general characterised the document as "timid", and activist movements understand that much work remains unfinished.

For 2014, Sustainable Development Goals need to be defined - ones that are far more audacious than the "unanimous" document signed in Rio.



Earth Summit 2012
J A P A N
地球サミット2012 Japan



Supported by



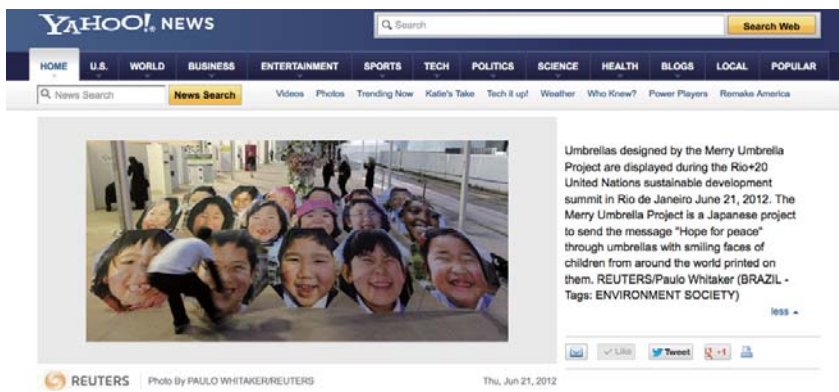




REUTERS Photo By PAULO WHITAKER/REUTERS Thu, Jun 21, 2012

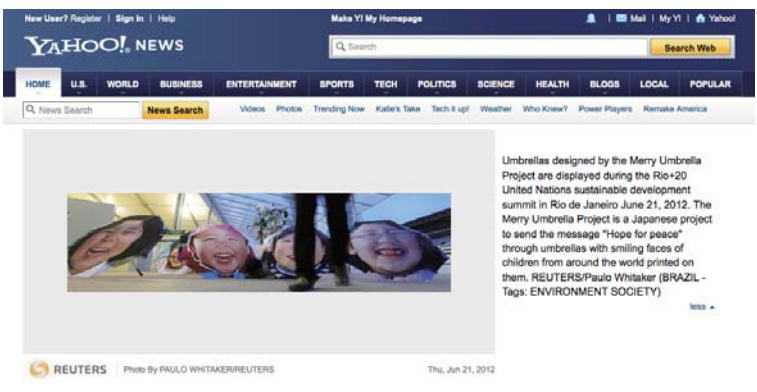
A woman poses for a photograph between two umbrellas designed by the Merry Umbrella Project, during the Rio+20 United Nations sustainable development summit in Rio de Janeiro June 21, 2012. The Merry Umbrella Project is a Japanese project to send the message "Hope for peace" through umbrellas with smiling faces of children from around the world printed on them. REUTERS/Paulo Whitaker (BRAZIL - Tags: ENVIRONMENT SOCIETY)

2012.6.21 YAHOO! NEWS ① 和訳
 [和訳] 2本の傘の間でポーズを決めながら写真を撮影している女性がいた。それはMerry Umbrella Projectがデザインした傘だ。2012年6月21日のリオデジャネイロから開かれた国連の持続可能な開発に関するサミットのRio+20会期中のこと。これは、世界中の子どもたちの笑顔がプリントされている傘を使って「平和への希望」のメッセージを送る日本発のプロジェクトだ。
 Paulo Whitaker (ライター)



2012.6.21 YAHOO! NEWS ②③

[和訳] 2012年6月21日のリオデジャネイロから開かれた国連の持続可能な開発に関するサミットのRio+20会期中に、Merry Umbrella Projectがデザインした傘が展示された。これは、世界中の子どもたちの笑顔がプリントされている傘を使って「平和への希望」のメッセージを送る日本発のプロジェクトだ。
 Paulo Whitaker (ライター)



REUTERS Photo By PAULO WHITAKER/REUTERS Thu, Jun 21, 2012

読賣新聞

2012年(平成24年)
 6月24日 曜日

リオ+20

【リオデジャネイロ】河野博子、井上陽子】ブラジル・リオデジャネイロで22日開幕した「国連持続可能な開発会議」(リオ+20)の成果文書は、具体的な目標や政策がなく、「成果」にはほど遠い結果となった。参加した環境団体メンバーや有識者からは厳しい批判の声が上がった。国連の潘基文・事務総長は閉会式で「会議は成功に終わった」と話した。開催国ブラジルのルセフ大統領も各国代表団への謝辞を繰り返して会場は拍手の渦になった。

しかし環境保護と経済発展を両立させる「グリーン経済」について世界共通の工程表を作ることを断念。先進国と途上国の対立は解けないまま、すべての国が合意できた部分だけを並べた結果、283項目の内容の薄い成果文書になった。ブラジルの環境団体のアロン・ベリンキーさんは「とてもがっかりした。あんな低水準から相当低いレベルだ」と顔をしかめた。記者会見を開いた国際環境団体グリーンピース・インタナショナルのクミ・ナイドゥさんも「これでは、リオ+20ではなく、リオ・マイナス20だ。国学院大の古沢広祐教授(62)も「大きな後退だ。日本政府が打ち出した環境未来都市も、人々が自然の豊かさの中で暮らしていく姿が見えず、魅力的でない」と厳しい。20年前に同じリオで開かれた国連環境開発会議(地球サミット)は、地球温暖化を防ぐための気候変動枠組み条約や生物多様性条約の署名が始まり、歴史的な成果を上げた。それだけに、地球サミットから20年の節目となるこの会議への期待は大きかった。会場の一角には22日、東

成果文書の骨子
 ▼グリーン経済は、持続可能な開発を達成するための重要な手法の一つ
 ▼全ての国に適用される持続可能な開発目標を策定するための政府間交渉を始める
 ▼国連持続可能な開発委員会に代わり、ハイレベル政治フォーラムを設置する
 ▼国連環境計画(UNEP)の機能を強化する

会場の中庭で行われた、被災地の子供の笑顔をアピールするパフォーマンス—河野博子撮影

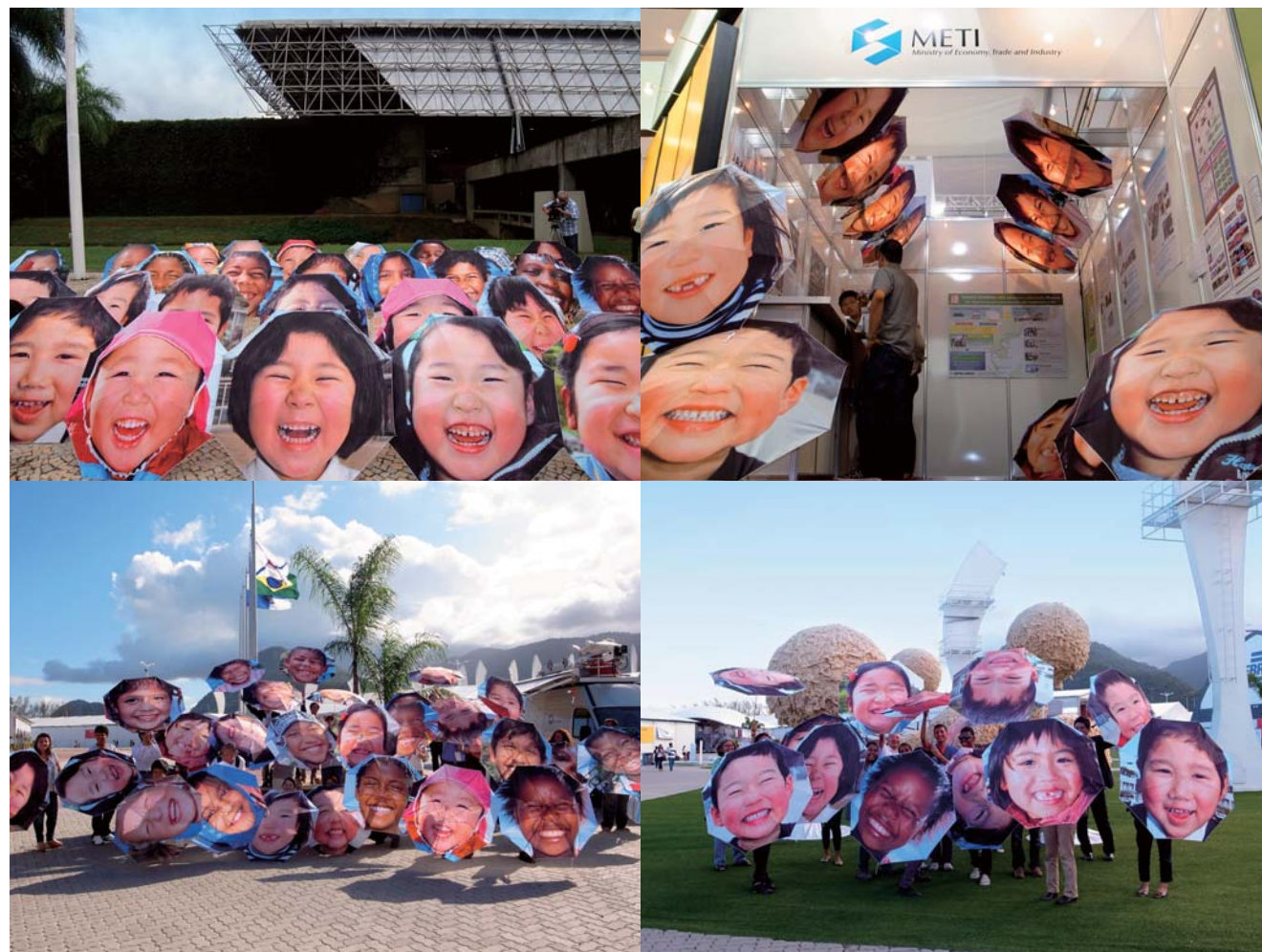


消えた20年前の熱気

国連最大級の会議は、力強いメッセージを発信することなく終わった。20年前の高揚感はなかった。

1992年の地球サミットは熱気が渦巻いていた。冷戦構造が崩れて現れた国際政治の空白を地球温暖化などへの関心が埋めた。その5年前に国連の委員会が打ち出した「持続可能な開発」という言葉は、今や大衆や研究機関を中心に市民権を得ている。会議では各国首脳が次々と出席をキャンセルした。先進国でやってきたのは、先月就任したばかりのフランスのオランド大統領だけだった。欧州は出口の見えない金融危機を抱え、世界

の水谷孝次代表(61)は「もう大人はダメ。子供たちこそ、未来の希望」と、行き交う各国の外交官らに向かって声を張り上げていた。中国は今や世界2位の国内総生産を誇り、高成長を続ける新興国であり、応分の責任を負うべき立場になった。温家宝(ウエン・ジァバオ)首相が出席するなど存在感をアピールしたが、問題解決に向けての議論ではほぼ沈黙を守り、消極的な姿勢に終始した。一つしかない地球の環境には許容限界がある。環境NGO、企業、研究者らがこの原則を肝に銘じて行動を始めたことだけが救いだ。(編集委員 河野博子)



先住民やNGO存在感 リオ環境会議が残した課題 サンパウロ支局 宮本英威

2012/6/30 7:00

22日までブラジルで開いた国連持続可能な開発会議（リオ+20）には直接交渉した政府関係者だけでなく、先住民や若者らも環境保護を訴えた。日本からは少なくとも80人以上の非政府組織（NGO）関係者が参加。東日本大震災や東京電力福島第1原子力発電所の事故について盛んに意見を交わした。

「私たちの伝統的な土地を壊さないで。未来の世代の声を聞いて」

各国元首の演説が続いていた21日午後、近くでひととき甲高い声が響いた。声の主はカナダの先住民タカヤ・ブレニーさん（11）。地元ブリティッシュコロンビア州でのパイプライン敷設計画の中止を訴えていた。

リオデジャネイロには両親と共に訪問。自然保護を訴える歌を作るなど関心を集めるために工夫を凝らす。「企業経営者は『開発と保護を両立』と言うけれど、できるわけではない」と懐疑的だ。

先住民らは鉱山やダム建設によって自らの土地が奪われることを懸念する。ブラジルの先住民も同国北部で計画中のペロモンテ水力発電所に反対の声を上げた。

本会議場から車で1時間以上かかる海岸沿いの公園。NGOがブースを構えた「ピープルズサミット」の会場では、カラフルな民俗衣装に身を包んだ人々が連日のようにデモを繰り広げた。



タカヤ・ブレニーさん（右）は、20年前の地球サミットでスピーチしたセバン・スズキさんと交流した（22日、リオ+20の会場）



リオデジャネイロのピープルズサミット会場で23日、原発事故について説明する坂田昌子さん（右から2人目）

同じ会場で、国連生物多様性の10年（UNDB）市民ネットワーク幹事の坂田昌子さん（52）は本会議が終了した後の23日朝も日本の原発について説明を続けた。「原発は事故が起ると被害が甚大。狭い日本に54基も原発があるんです。ブラジルはまだ2基。止められる」

坂田さんの説明を聞いたリオ在住の中国人ウイスキー・チャオさんは「2度と起こしてはいけない」と真剣に受け止めた。坂田さんはスペインの参加者から「日本が今後原発にどの程度厳しく臨むかが世界の基準をつくる。しっかり監視して」と訴えられたことが印象に残っているという。

アートディレクターの水谷孝次さん（61）は東北の子供らの笑顔の写真を大きく印刷した50本の傘を展示。どんな問題がおきても「やっぱり最後は笑顔」との思いを込めた。

多くの人の目に触れるよう数時間ごとに展示場所を動かした。見た人からは「すてきな笑顔だね」「このサミットで最も印象に残った」との感想が漏れた。

リオ+20では期間中に各国政府とNGOが意見を交換する場も多く設けられた。20年前に同じリオで開いた国連環境開発会議（地球サミット）にも参加した国学院大学の古沢広祐教授は「意見伝達の場ははるかに増えた」と話す。

ただ今回の会議で各国政府が合意した成果文書「我々が望む未来」は具体的な成果には乏しかった。欧州危機に揺さぶられる先進国は資金面での余裕がない。今後の経済成長を阻害されたくない新興・途上国との間で、国際社会の合意形成はますます難しくなる。

それだけに「NGOや企業など国家以外の様々な主体が独自に持続可能な開発にかかわることがより重要になる」（サンパウロ大学国際関係研究所の舩方周一郎客員研究員）。皮肉にも国家間で得られた成果の乏しさが、人々やNGOが抱える責任の重さを際立たせる会議となった。

MERRY SMILE ACTION

Rio+20

日程 2012年6月15日（金）～6月24日（日）
場所 ブラジル・リオ 地球サミット2012（会場・他）



笑顔を、被災地から世界へ。

JapanVoice×MERRY PROJECT。世界中から5万人以上が集まるリオ+20の開催期間中、被災地の子どもたちの笑顔の傘を本会議所他様々な場所に展示した。それには3つの理由がある。

1) 世界の人々への感謝。

震災直後から私達は世界の人々に被災地から笑顔を贈る。子どもたちの輝きが今度は世界の誰かの生きる力を願う。

2) 新たな世界への希望

震災前の日本は物質的には豊かだけれども年間3万人以上の人々が自ら命を絶つなど、とても笑顔が新東しにくい社会だった。震災を経て私達は少しずつ、本当に大切なもの、本当の豊かさに気付きはじめた。そのことを教えてくれたのは何よりも子どもたち。真に持続可能で平和な未来に向けて被災地から生まれつつある希望を本当の笑顔とともに世界に届けたい。

3) 世界の子どもたちの未来に。

「なぜあなたたちが今こうした会議に出席しているのか、どうか忘れないでください。そして一体だれのためにやっているのか。それはあなたたちの子ども、つまり私たちのためです。みなさんはこうした会議で、私たちがどんな世界に育ち生きていくのかを決めているんです。」

20年前の地球サミットで、1人の少女セバン・スズキが首脳たちにそう訴えた。20年後の今も全く変わる事のないこのシンプルな真実を再びリオに集まった人々に、もう一度伝えた。



Earth Summit 2012
JAPAN
地球サミット2012 Japan



Supported by



Rio+20

Conferência da ONU sobre Desenvolvimento Sustentável termina com acordo criticado e deixa para mais adiante definições cruciais para o futuro do planeta, como metas comuns e financiamento para atingi-las

Acabou...



ROSTOS DE crianças sorrindo estampados nos guarda-chuvas usados por participantes no último dia da Conferência Rio+20, no Riocentro. Em meio a eles, circula Ghazael Habibyar, da delegação do Afeganistão

Após dez dias de reunião, encerrados por um emocionado discurso da presidente Dilma Rousseff, a Conferência da ONU sobre Desenvolvimento Sustentável, mais conhecida como Rio+20, terminou no início da noite de ontem debando como legado um documento final criticado por diferentes setores — de ambientalistas a alguns dos chefes de Estado que participa-

ram das discussões no Riocentro —, mas defendido pela ONU e pelo governo brasileiro como uma espécie de roteiro a partir do qual os diferentes países poderão conduzir suas ações de desenvolvimento sustentável.

As duas principais definições — quais exatamente são os Objetivos de Desenvolvimento Sustentável e como financiá-los — ficaram adiadas respectivamente

para 2013 e 2014. Mas, mesmo para os críticos, a conferência não foi considerada tempo inteiramente perdido, já que promoveu a união de diferentes setores da sociedade civil, catalisada pelo caldeirão da Cúpula dos Povos e apresentou algumas iniciativas mais concretas, a mais notável delas o compromisso de redução de emissões de carbono assumido pelos prefeitos das

maiores metrópoles do mundo.

Desde o dia 13, a Rio+20 também mudou a cara da cidade, com rostos e corpos vindos de todas as partes do globo reunidos no Riocentro, no Aterro do Flamengo e no Forte de Copacabana, onde se encerrou ontem a exposição "Humanidade 2012", que, destoando das negociações oficiais, foi um retumbante sucesso de público e crítica.

Resultados mais concretos não aconteceram por restrições de alguns países em assumir compromissos de financiamento, com a desculpa da crise econômica global. Os EUA, que deveriam desempenhar papel de protagonismo, tiveram participação discreta, simbolizada pela breve presença da secretária de Estado Hillary Clinton, que só veio para o último dia da conferência.

Em visão otimista, o secretário-geral da Rio+20, Sha Zukang, disse que a insatisfação é sinal de que algo de bom foi feito.

— Ninguém está feliz com o nosso trabalho, mas esse é o nosso trabalho. Muitos governos assumiram compromissos em Copenhague (em cúpula sobre mudanças climáticas, em 2009) e, até hoje, não cumpriram. Prometer é fácil, difícil é cumprir.

Lixo reciclável usado na obra de Vik será doado

O registro fotográfico da obra será leiloadado e a renda, também, doada. **Página 10**

Humanidade pode virar exposição itinerante

Sucesso de público no Forte pode continuar em outras cidades. **Página 11**

As Nações Unidas e suas muitas caras

Na Rio+20, um caldeirão de muitas culturas, cores e raças. **Páginas 6 e 7**

国際会議場前 (リオセントロ)















